

伊豆国府について

近藤 史昭

1. はじめに

現在伊豆国府の所在地については明らかになっていない。その所在地については、これまでに複数の説が主張されてきた。地名に根拠を求めるものや地理学的なフィールドワークによるもの、考古学的な成果を用いたものなど実に多様である。しかし、ここにいたるまで、それらの説の整理が不十分であったということは否めない。いまだに新旧それぞれの説が異なる媒体で発信されるため、見る人を混乱させる。

そこで本稿では、これまで総括的記述のなかった伊豆国府に関する研究史を整理したうえで、比定地が複数あることから生まれる伊豆国府に対する認識のズレを若干ながら指摘したい。さらに、現在国府中枢域の比定地とされている上才塚遺跡の遺構・遺物について検討をおこなうことで、今後の伊豆国府研究の基盤としたい。

2. 伊豆国府の研究史

伊豆国府の所在地が最初に記されるのは、伊豆の地誌として秋山富南によって江戸時代に著された『豆州志稿』である。萩原正平・正夫両氏によって1895年に増訂版が刊行された。その増訂部分に国府に関する記述がある。それによると、三嶋大社東側に小久保（こくぼ→こくふ→国府と解釈）や長谷（序舎）といった地名が存在することから、これらが伊豆の国府比定地にあたるとしている（図1）。また、田方郡田中郷（現在の伊豆の国市）より小久保・長谷町周辺に国府が移転しているという点も指摘されている。国府「田京 - 三島移転説」の嚆矢である。なお、管見の限りでは伊豆国府の移転を裏付ける文献資料は確認できない。

その後、萩原正夫氏は1912年に「伊豆国府考」を著しており、地名の検討から田京（伊豆の国市田京）周辺に国府が存在したことを主張している。伊豆諸島から北へと移動する三嶋大社が田方郡田中にある広瀬神社から現在の場所の移ったことをその根拠としている。三嶋大社は国府の総社であるため、神社の移動は国府の移動を裏付けるという主張である。延暦噴火に伴い箱根路が利用され、人口が増加すると、三島市街地に国府が移転すると説明している。

これをうけて、静岡県史でも「田京 - 三島移転説」をとりあげている（足立1932）。ここでは国府は最初田京に在したが、蝦夷に対する軍事行動に際して「伊豆の地位は大いに向上して田京の地は不便を感じ」（足立1932）小久保・長谷町周辺に移ったと説明している。

田京 - 三島移転説は、国府と三嶋大社とが密接にかかわっていて、両者が同時に移動するという考

えに立脚している。これに対して、当初から国府が三島にあり続けるとする「三島説」もあらわれる。

医師であった三島通良氏は、国府は当初から三島市街地にあったと結論付けている（三島 1917）。三島氏は古代瓦の散布状況などから蓮行寺（現在は伊豆国分寺と改名）が、伊豆国分寺にあたと断定した。そして、同寺が延喜式の時代から同地に所在し続けることを論拠に、国府の所在地を三島市街地に比定している。

さらに、戸羽山瀚氏は地名と地形から三島における国府の範囲を推定した（戸羽山 1947）。戸羽山氏は田京に国府が存在したことを否定し、小久保・長谷町に国府を比定している。この論の特徴的な部分は、三嶋大社と国府の所在地とを切り分けることを主張した点である。この点は現在の我々の考え方と近い。

軽部慈恩氏は考古学的な調査成果を活用して、国府が三島に存在したことを主張している（軽部 1958）。当時、三島市誌の編纂のために市街地の古代寺院や古墳などの調査がおこなわれた。軽部氏はそれらの調査成果から、国分寺や条里遺構、古墳などが三島市街地に分布することを論拠として、現在の市街地が奈良時代から伊豆の中心的な都市であると考えた。そして、伊豆国府の国府が鷹部屋（三島市芝本町）に所在すると主張した。この説がその後最もポピュラーな説として流布していく。ただし、軽部氏は小久保・長谷町に国府が所在した点は肯定しており、平安時代中頃に鷹部屋から小久保・長谷町に移動したと結論付けている。

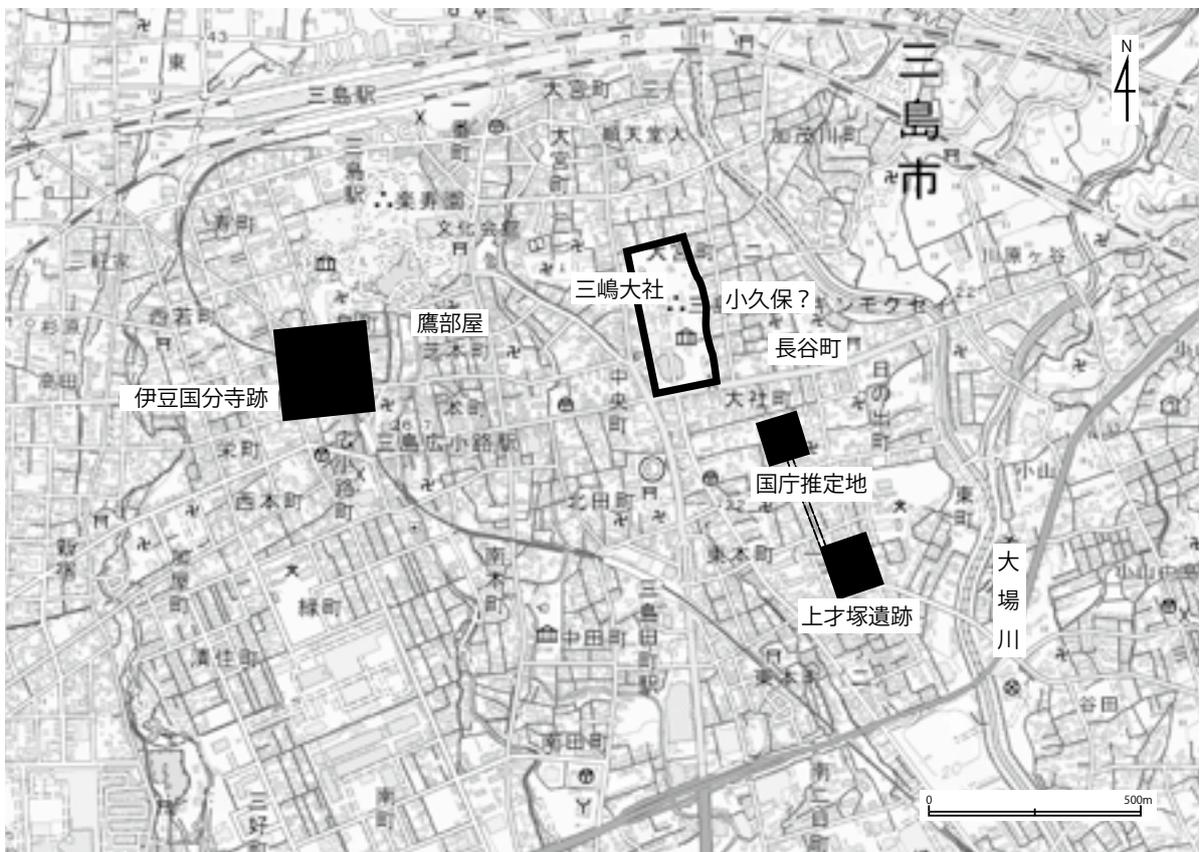


図1 国府推定地と上才塚遺跡の位置（S=1/18000、国土地理院地図に加筆）

軽部氏に対して「田京 - 三嶋移転説」を主張する論考もみられた。久邇登仁氏は軽部説に反駁して、田京国府論を展開している（久邇 1972・1974）。久邇氏も国府と三嶋大社がセットで移転すると考えており、三嶋大社の移動にともなって、国府が現在の下田市に所在する白浜神社付近から田京に移ったと主張している。

一方で、地理学的調査によって伊豆国府の範囲を示す研究もみられた。藤岡謙二郎氏は三島市内を踏査することにより、現存する国府地割や条里地割を確認した。そして、現在の三島市広小路町を中心とする六町四方の範囲を三島の国府域であると指摘している（藤岡 1969）。

1980年代頃までは、北伊豆地域全体で官衙遺跡に関する調査成果は少なかったが、1990年代以降、記録確認調査の件数の増加に伴い、官衙関連遺跡の調査例も増加する（図2）。1970年代以降は伊

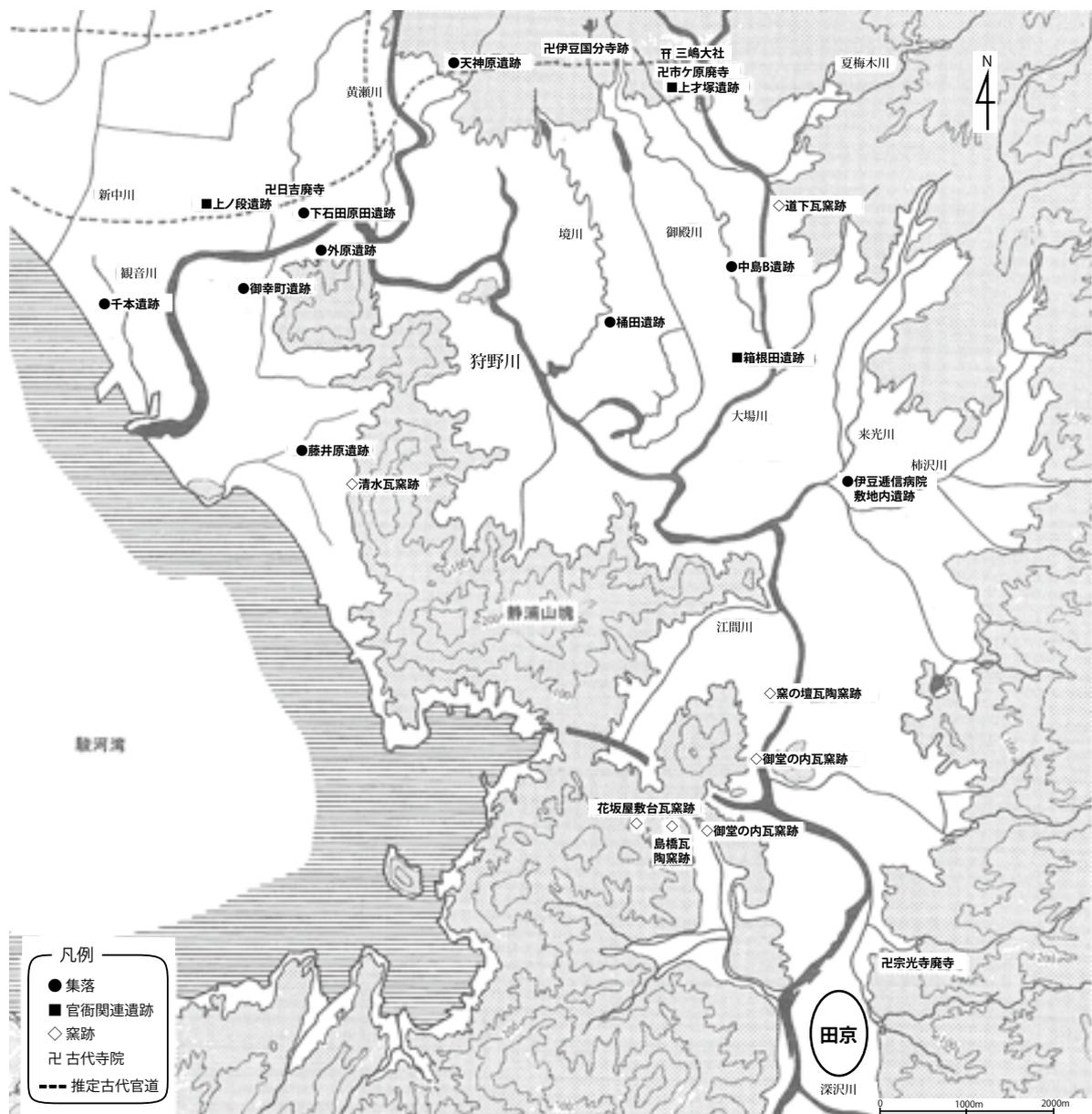


図2 狩野川水系の遺跡位置図（S= 1/80000、（鈴木一 2003）に加筆）

豆通信病院敷地内遺跡の調査が進んだ。特に 2012 年の発掘調査では、畿内系土師器や腰帯・帯金具、墨書土器など官衙を想起させる土器が出土した。このことから、この遺跡が田方郡衙である可能性も指摘されている。

また、1981 年の調査を皮切りに多くの堅穴建物が検出される中島 B 遺跡の調査が進んだ。上舞台地点では、「L」字もしくは「コ」の字状に並ぶ、8 世紀初頭掘立柱建物群が検出されたことから、当初、官衙遺跡であるとも考えられた。しかし、いわゆる官衙的遺物が出土しないことから、これらの建物群には豪族居館という評価が与えられている。

三嶋大社の南側に広がる上才塚遺跡では 1990 年に発掘調査がおこなわれている。2ヶ所の調査地点からは区画溝や道路遺構、築地で囲まれた倉庫跡などが検出され、馬歯や石帯も出土している。鈴木敏中氏はこれらの調査成果をもとに、宮倉町（三島市大社町）に国庁が存在すると推定した（鈴木敏 2003）。柱穴列により区画された掘立柱建物を国司館であると考え、その東側の南北にのびる道路遺構を朱雀道であると考えた。さらに、朱雀道を北側にのぼした先にあたる土地区画が変化する部分が国庁にあると考察している。従来国庁比定地と言われてきた長谷町より、南側に国庁を比定している。遺構から伊豆国府を論じた初めての論考である。

これらの成果を総括して静岡県史では、三嶋大社の西側に国府の施設が分散的に置かれることを推論した（向坂 1994）。当時は国府像が方画地割から施設が分散配置されるイメージへと転換する時期であった。三嶋大社の西側に国府域を想定しており、上才塚遺跡の成果が反映されていないようにみえる点は、検討を要する。しかし、当時の最新の知見を取り入れつつ、新たな伊豆国府像を提示した点は高く評価できる。

大場川・御殿川の合流地点付近に所在する箱根田・伊勢堰遺跡は、1999 年より調査が進み、田方郡の律令期を考える上で重要な成果を我々に与えた。遺構としては運河や倉庫が検出され、遺物は人面・文字墨書土器や木簡、石帯、陶硯類など律令制の地方への波及を想起させるものが多い。狩野川水系における官営の津と解釈される遺跡である。

以上のように、伊豆国府所在地論争は田京 - 三島移転説と三島市内説に主張がわかれてきた。1950 年代頃までは、国府と国分寺および国府と総社を一体的なものにとらえ、それらの位置を明らかにすることにより、明確な痕跡が確認できない国府の所在地を理解しようとしてきた。神社と寺院それぞれを重要視する言説同士の衝突と換言できるかもしれない。1970 年代になると歴史地理学的な分析もおこなわれるようになり、官衙関連遺跡の調査例も次第に増加してきた。そして、1990 年代に至って考古学的な成果をもって国府所在地を議論する材料を得た。しかし、以上のような言説が未整理なまま展開されたため、国府の所在地については媒体によって様々に紹介されている。

近年国府所在地や比定地を集成した一覧表（大橋・江口 2020）では、伊豆国府の所在地について「主な比定地は田方郡内の三島市と伊豆の国市で、後者は伊豆の国市にあった国府が三島に移転する説」と紹介されている。ここでは田京 - 三島移転説と三島市内説が併記されている。

一方で、歴史に関心のある地元の人々には鷹部屋説が広く信じられているようである。現在、芝本

町の国庁比定地には、その所在をあらわす石碑がある。また、中学生の郷土副読本でも鷹部屋にあたる場所が国府として紹介されている。昭和30年代の『三島市誌』の知見がそのまま活用されており、その発表から60年以上を経て、最新の知見を十分に伝えられていない点は当市の文化財担当者として忸怩たる思いがある。

一方で、駿河から伊豆地域の調査成果を知悉している研究者の間では、上才塚遺跡周辺に国府中枢域が存在するという認識が浸透しているようである。鈴木一有氏は律令体制の成立過程で、官道の結節点である上才塚遺跡周辺に伊豆国府が置かれたことを指摘している（鈴木一 2013）。

以上のように、様々な場所が比定地として提示されているため、伊豆国府について知りたい人々は、このことを調べれば調べるほど混乱するはずである。

3. 上才塚遺跡について

現在、伊豆国府の国司館と目されるのが上才塚遺跡である。富士山の噴火によって堆積した御殿場泥流層に支持される扇状地に所在し、遺跡の東側には大場川が流れる。区画溝や国司館とされる遺構を検出しており、出土遺物も官衙に関連するものが多い。前述した鈴木氏の論考も本遺跡を分析したものである（鈴木敏 2003）。ここでは鈴木氏の論考を起点として、この遺跡に検討を加えたい。

本遺跡の主要な遺構は、南北にのびる幅0.4～0.6m程度の区画溝が検出され多くの遺物が出土した。さらに、柱穴列と2棟の掘立柱建物からなる施設、両側に溝が掘られた道路遺構が確認されている（図3）。この建物群は国司館に、道路遺構は朱雀道に比定されている。鈴木氏は朱雀道を北側に延長したところに国庁が所在すると推定した。このような配置は下野国府を念頭において復元されたものと推察できる。下野国府の場合は国司館の北方に国庁が確認されており、それらが道路遺構で結ばれている。近年、国府の発掘調査が進み国司館の実態もわかるようになってきたが、国府ごとで国庁と国司館の位置関係は一様でない。国司館の位置から国庁の位置を逆算して予測する手法には慎重にならざるをえない。

他方、総柱・掘立柱建物と区画施設からなる一院を国司館に比定したことについては首肯できる。柱穴が直径1m程度の大型なものであるし、周辺から出土する遺物をみてもこれらの遺構は官衙関連施設として評価してよいだろう。また、国司館が溝や塀により区画されることは、先行研究で繰り返し指摘されている（田中 2003 など）。他国の国府に目を向けると武蔵国府や肥前国府においては、国司館や国司館推定地の主屋に付属して柱間、桁行が2～3間程度の小規模建物が付属する。特に、肥前の国司館では総柱建物の倉庫が3棟付属している。このような類例から、上才塚遺跡の建物遺構が国司館の一部であることも想定できる。

ただし、肥前国府においては国庁の北側に、複数の3間×3間の総柱建物が主体の倉庫群が確認されている。この倉庫群も区画施設の溝をもっており、建物+区画施設のセットとなる。国府内には国司館と関連しない倉庫群が存在する例もあり、当該遺構を検討するにあたっては広範な可能性を想定しておく必要があるだろう。そして、上才塚遺跡の建物群については、すでに報告されている範囲の

外側の調査が待たれる。

建物群の柱穴からは年代を決定づける遺物が出土していないが、周囲を囲う柱穴列の遺物から8世紀前半の年代を与えられる。また、大型溝状遺構や道路遺構も同様の時期のものとみられる。官衙施設がこの時期に整備されていたことがわかる。また、遺跡範囲の南辺から南東部においては試掘調査によって落ち込み状の遺構や溝状遺構、柱穴などを検出している。遺物も緑釉陶器などがともなっており、さらに南側にも官衙施設が存在するものと推測する。

次に、出土遺物から遺跡の性質について検討したい。溝状遺構より出土した石帯は当該地に国司階級の人物がいたことを示唆する遺物である。石帯は瑪瑙製の巡方であり、一個体の半分程度が残存している。『延喜式』の弾正台式によれば、瑪瑙の腰帯は五位以上の人物が帯びることができると規定されている。国司やそれに関連する人物が使用したものである可能性が高い。また、石帯が登場するのは8世紀第4四半期以降といわれている（田中 2003）。緑釉陶器や、細片であるため断定しにくい。壺Gと思われる長頸壺も出土している。これらは、遺構の検出が乏しい9世紀以降にも官衙が機能することをあらかず遺物と評価したい。

さらに、本遺跡の特徴として須恵器の長頸壺や大型の甕が複数含まれることが挙げられる。本遺跡に近い大場川・御殿川の流域には奈良・平安時代の集落遺跡が分布するが、長頸壺や大型甕の出土は

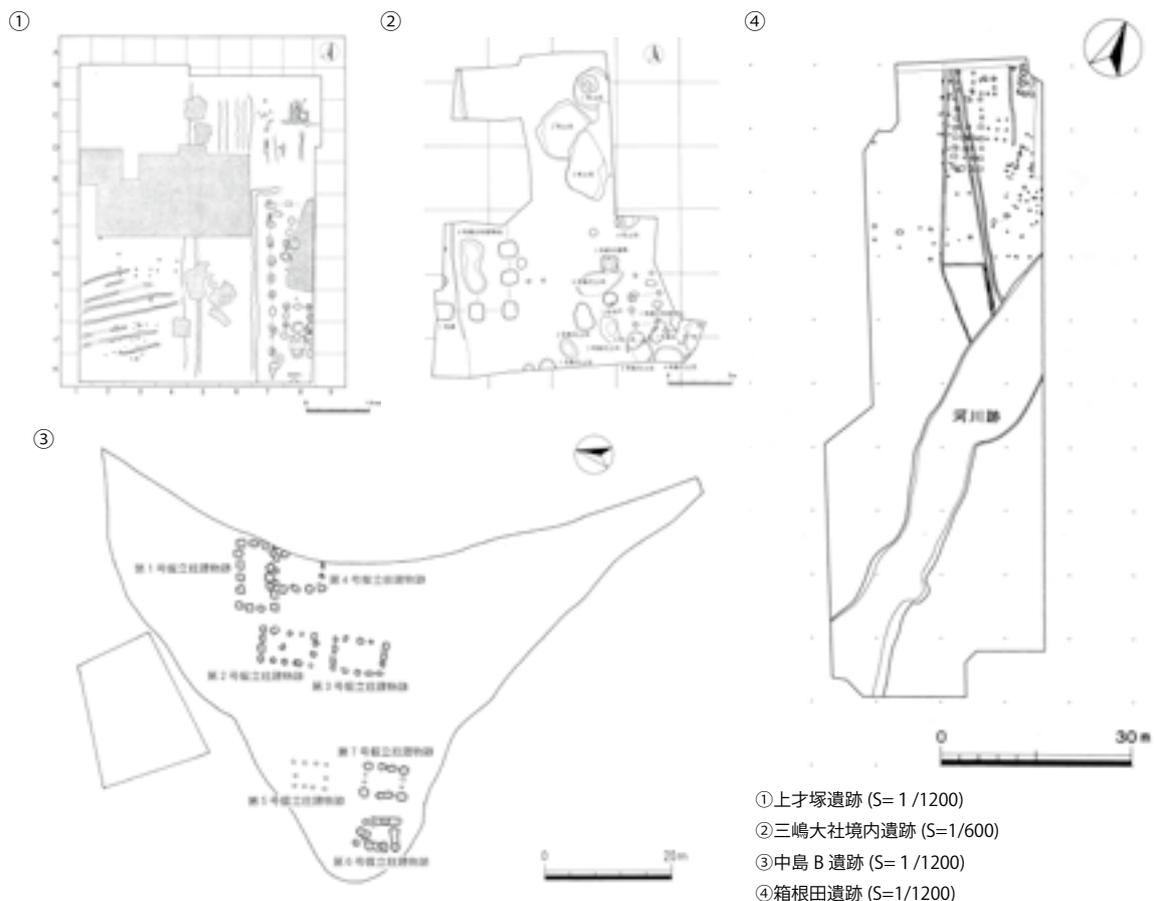


図3 大場川流域の官衙関連遺跡平面図（各報告書より引用）

墨書土器などのいわゆる官衙的遺物が出土する遺跡に偏る。そして、大場川・御殿川流域で、貯蔵具が飛び抜けて多く出土するのが伊勢堰・箱根田遺跡である。運河遺構からは長頸壺や非常に巨大な須恵器甕などが出土している。これらの遺物には8世紀前半のものが含まれ、特に須恵器大甕は多くがこの時期のものである。倉庫遺構も検出されており、8世紀前半以降、周辺の河川を利用した水運の拠点となっていたと考えられている。長頸壺や大型甕などは、上才塚、伊勢堰・箱根田の両遺跡でまとまった量が出土しており、河川を介したモノの移動がおこなわれていた可能性が高い。文献資料の検討から、伊豆国が高度な造船技術を持っていたことが指摘されており、水運に利用するような船を建造するノウハウも保持していたのではないかと想像される（仁藤 1996）。さらに、両遺跡では共通して馬歯が出土しており、河川物流における曳馬の利用なども想像できる。

4. 奈良・平安時代の狩野川水系

最後に、狩野川水系における奈良・平安時代遺跡のなかで、上才塚遺跡の位置づけを確認したい。

上才塚遺跡は先述した通り、8世紀前半に大場川右岸の箱根山の尾根が切れた平地上にあらわれる。同時期には大場川流域に物流拠点として伊勢堰・箱根田遺跡が登場する。古墳時代から継続する集落である中島B遺跡では大型掘立柱建物が出現し、畿内系土師器なども出土する。また、来光川流域においても、伝統的集落である伊豆通信病院敷地内遺跡において畿内系土師器が出土する。狩野川河口付近には藤井原遺跡や下石田原田遺跡などの大規模集落が成立し、河口に近い位置に官衙として上ノ段遺跡が出現した。これらは川を介した水運により結ばれ、モノの移動をおこなっていた。そして、上才塚遺跡は大場川と箱根路に向かう官道を押さえる要衝におかれたのであった。

8世紀後半以降、当該域のモノ移動は一層増加したものと推測できる。伊勢堰・箱根田遺跡では律令祭祀関連遺物が急増し、壺Gなども出土している。坏などの供膳具の数も急増する。中島B遺跡等の大場川・御殿川流域の集落遺跡もこの時期に多くの堅穴建物が検出される。それまで目立った集落の見られなかった境川流域では墨書土器や緑釉陶器、バリエーション豊かな供膳具が出土する桶田遺跡の登場が目を見守る。伊豆通信病院敷地内遺跡では、非常に多くの堅穴建物が検出され、墨書土器や銚帯類が出土し、官衙的性格が強まる。狩野川中流域では外原遺跡で多くの人面・文字墨書土器、壺Gなどが出土しており、物流の中継的な役割を果たしていたことが推測できる。河口付近の集落も8世紀後半から9世紀を通して規模の増大がみられる（小崎 2023）。上才塚遺跡においても、瑪瑙の石帯や緑釉陶器、壺Gとみられる長頸壺などが出土している。遺構の実態は確認できないものの国衙としての機能を有していたものと推察している。

また、三嶋大社に関する研究では同社が自然災害にともなう移転を繰り返し、12世紀頃までに国府のある現在の場所に鎮まるという説が提示されている（國學院大學博物館 2023）。国司が三嶋大社を国衙周辺に移転させたというのが、この説のなかでの説明である。伊豆国府が12世紀頃まで存続した可能性は十分に考えられるが、それを裏付けるような考古学的な発見は今のところない。

5. ふたたび伊豆国府の所在地について - まとめにかえて

以上、雑駁ながら伊豆国府に関する知見の整理をおこない、上才塚遺跡について検討を加えた。最後に伊豆国府所在地の各説について評価したい。

田京 - 三島移転説については田京周辺において官衙遺跡の発見例がない⁽¹⁾ことや、上才塚遺跡が8世紀前半頃から官衙として機能していたことを考えると首肯しがたい。

一方で、三島市街地の大場川左岸に分散して国府関連施設が存在していた可能性は十分に考えられる。軽部氏が国庁比定地とした鷹部屋周辺には古代瓦が散布しており、大型の掘立柱建物が検出されたといわれている。しかし、その記録は市誌にも掲載されておらず、詳細は曖昧であり、評価は保留せざるをえない。なお、鈴木敏中氏は、この場所を国分尼寺に比定している(鈴木敏 2003)。

三島説のなかでも小久保・長谷町に国庁をあてる説については、示唆に富んでいる。三嶋神社境内の発掘調査では倉庫とみられる掘立柱建物が検出されており、曹司が上才塚遺跡から三嶋大社周辺まで広がることも想定できる。

延暦21年(802)には筥荷途(箱根路)が開かれた記録があり、長倉駅より箱根に向かってのびる東西の道が存在していたことがわかる。また、やや時代がくだるものの『一遍上人絵伝』からは13世紀頃には三嶋大社南側に同様の道が存在していることが読み取れる。国府関連施設はこの街道を中心として展開している可能性が高い。大場川の水運を利用できることも勘案すると、上才塚遺跡から小久保・長谷町のあたりに国庁や国司館、倉庫群などの諸施設が存在したことは十分に考えられる。

そして、伊豆国府の中核域については上才塚遺跡周辺に展開するものとする。特に、遺物の内容については、狩野川水系の物流の影響を反映したものであると評価できる。近年では、周辺の曹司を含めた面的な広がりとして国府をとらえる見方が主流となっている。伊豆国府についても考古学的な成果を積み上げて面的に認識することが重要になるだろう。

最後に、三嶋大社周辺が伊豆国府と呼ばれていたことを示す文献資料に簡単に触れたい。これらの記述は国府中核域が現在の三島市街地に存在していたという説の根拠の一つとなっている。

13世紀に成立する紀行文『十六夜日記』では、鎌倉へと向かう阿仏尼が「伊豆の国府」に滞在し、「三島の明神」を訪れている。この時期には、「国府」という名称が三嶋大社周辺において地名化していたことをあらわす。阿仏尼は三嶋明神を訪れて歌を詠み、翌日には鎌倉への道を急ぐため箱根路を越えていくのであった。

下記の方々には本稿の執筆にあたって重要なお教示をいただきました。記して感謝申し上げます。

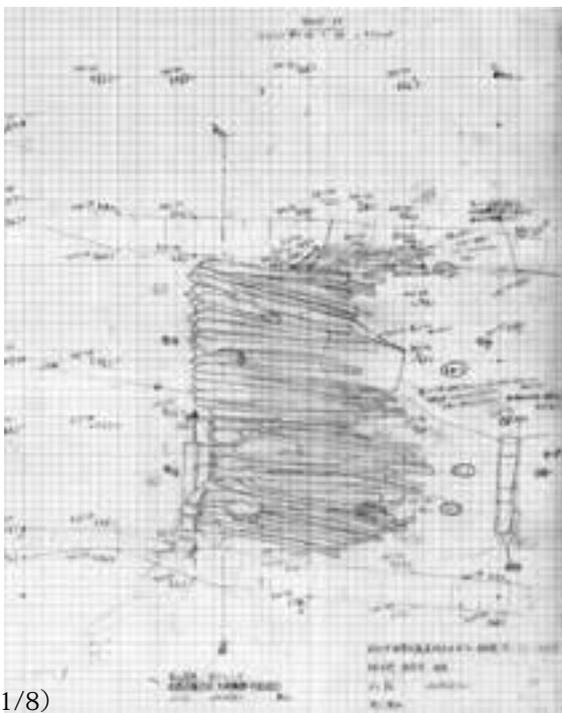
芦川忠利、柿島綾子、木本久子、島田章広、辻真人、寺田光一郎、平林研治、藤村翔(敬称略)

註

(1) 伊豆の国市教育委員会島田章広氏のご教示による。

引用・参考文献

- 秋山富南原著 萩原正平・萩原正夫増訂 戸羽山瀚修訂編纂 1967 『豆州志稿』長倉書店
- 足立鍬太郎 1932 「律令の完成と地方制度」『静岡県史』第2巻 静岡県
- 阿仏尼著 玉井幸助校 1934 『十六夜日記』岩波書店
- 大橋泰夫・江口 桂 2020 「対談古代の国府を語る」『季刊考古学』第152号 雄山閣
- 軽部慈恩 1958 「集落の形成と都市への発展過程」『三島市誌』上巻 三島市
- 久邇発仁 1972 『田京国府論 其の一』大仁町教育委員会
- 久邇発仁 1974 『田京国府論 其の二』大仁町教育委員会
- 黒板勝美編 1931 「日本紀略」『国史大系 新訂増補』第10巻 国史大系刊行会
- 國學院大學博物館 2023 『三嶋の神のモノガタリ 焼き出された伊豆の島々』
- 小崎 晋 2023 「沼津における古代の遺跡様相」『狩野川・富士川が作り出した古代社会 ～沼津・富士の原風景を考える～』沼津市教育委員会・富士市教育委員会
- 田中広明 2003 『地方豪族と古代の官人 - 考古学が解く古代社会の権力構造 -』柏書房
- 戸羽山瀚 1947 『伊豆国府に就いて』『伊豆史談』復刊第4号 伊豆史談会
- 鈴木一有 2013 「7世紀における地域拠点の形成過程 東海地方を中心として」『国立歴史民俗博物館研究報告』第179集 国立歴史民俗博物館
- 鈴木敏中 2003 「伊豆・駿河東部」『静岡県の古代寺院・官衙遺跡』静岡県教育委員会
- 奈良文化財研究所編 『第21回古代官衙・集落研究会報告書 地方官衙政庁域の変遷と特質』奈良文化財研究所 研究報告第20輯 クハプロ
- 仁藤敦史 1996 「伊豆国の成立とその特殊性」『静岡県史研究』第12号 静岡県
- 萩原正夫 1912 「付録 伊豆国府考」『事代主神事蹟考：一名・伊豆三島神社祭神考』誠之堂
- 藤岡謙二郎 1969 『日本歴史叢書 国府』吉川弘文館
- 藤村 翔 2024 「古代駿河・伊豆における土師器埴の展開とその特質」『カツオの古代学』吉川弘文館
- 三島通良 1917 『伊豆国史蹟研究 第1報告書摘要』
- 向坂鋼二 1994 「国府・郡家の構造と機能」『静岡県史』通史編1 静岡県
- 山中敏史 1994 『古代地方官衙遺跡の研究』塙書房
- ※ 各遺跡の状況については発掘調査報告書を参照したが、紙幅の都合上割愛した。



(1/8)

亀山古墳 鉄鍬出土状況図 原図
〔加西市教育員会 2005『玉丘古墳 I』所収、第 31 図〕